

成長株 W.K.M. Lau

最近、精力的に、解析に、理論に、モデリングにと活躍し、GLA/GSFC (Goddard Laboratory for Atmosphere/Goddard Space Flight Center) に、active な group を組織し、維持している。K.M. Lau に聞いてみました。

問：何故、アメリカへ行ったのですか？

— 高等教育(大学院)を受けるつもりであったので、迷いはなかった。香港では、高等教育(大学院)を受ける機会はありません。そこで、大学を卒業したあとアメリカのいろんな大学に願書を出しました。シカゴ大学、カルフォルニア工科大学、パークレー、ワシントン大学等の物理学科に合格しました。

問：どうして、ワシントン大学を選んだのですか？

— 変な事情なのですか、香港にいる時、一・二位を争っていた友人が、パークレーに入ったことと、自分は、出来る限り有名でない大学に行って、そこから、のし上がってゆこうと思っていましたから、ワシントン大学にしました(兄もいたことだし)。

問：何故、気象学を選んだのですか？

— 最初は、物性論をやっていました。その頃は(70年代の始め)、高エネルギーは、展望がなく、物性なら就職がありそうに思ったからです。本当は、理論的なことがやりたかったのですが、RA (Research Assistant ship) をくれた先生が、実験をやれというので、実験をやっていました。途中で、実験中に大失敗をして、それが、引き金となって、他に移ろうと思いました。留学生にとって、1年目は、いろいろと、迷う時でもありました。

そこで、大気汚染でもやろうと思って、大気化学の先生に会いに行きました。RA をくれるということで、転科の手続きをしたら、その先生のグラントが取れなくなって、この話は、パーになりました。そこで、困って大学院の学生相談所に相談にいったのだが、その時の相談役が、J. Holton でした。大学院では、他の科目の授業も一杯とっていたので、P. Webster の授業も聞いていました。そこで、Holton

が、モンスーンに興味はないか、と聞いて来ましたので、即、OK と答え、そこから、気象学とのつき合いが始まりました。

問：それまで、気象学について考えたことはなかったのですか？

— それまでは、科学だと思っていませんでした。ですが、始めてすぐに面白いものだということが分かって来ました。再発見したわけです。

問：あなたは、理論も観測(解析)も両方やっていますが、どうしてですか？

— アメリカでも、理論の連中は、観測より偉いと思っているから観測には、手を出さないし、観測の連中は、理論の連中に対抗意識を持っています。しかし、両方やってゆく必要があります。この事は、Montrey の Naval Post Graduate School で学びました。

問：どうして、Montrey に行ったのですか？

— それも奇妙なことなんです。C.P. Chang とインドで会って、意気統合して、Montrey に行くことになりました。実は、P. Webster と大気・海洋結合モデルをやっていたので、Miami の Krauss のところへ行くことに決まっていたのです。C.P. Chang は、「そんなもの関係ない」と云って、テキパキと話を決めてくれたのです。

問：それでは、どうして、NASA へ動いたのですか？

— Montrey は良かったのですが、tenuor track になっていないという感じを受けました。なぜなら、Montrey は、予報などが main で、climate みたいな research は、main ではなかったからです。それに、Montrey は isolate されています。その頃、GLAS で新しい Laboratory が始まることを聞いたので、M. Halem に直接電話をしました。そうしたら、interview をしてくれて、採用が決まりました。NASA は、従来は、MIT の誰かとか、NASA の誰かが知っている誰か、という具合に採用していて、全く無関係に入ったのは、私が初めてです。

問：日本の印象はどうですか？

— 日本は、良くまとまっていると思います。アメリカは、日本ほどまとまっていなく、もっと、competitive です。互に、fighting を繰り返すことが多いと思います。

問：日本の気象学についての印象は？

— 他の分野は知りませんが、気象力学と熱帯気象の分野については、日本の学会の評価は確立しています。

日本での仕事も、JMSJを通じて、良く知っています。

問：これから、興味のある分野は？

—やはり、Climate と meso-scale の問題です。climate のなかには、monsoon などの tropical meteorology の問題も含まれます。要するに、low-frequency dynamics が面白いと思います。

問：最後に、若い人達に言いたい事は？

—自己主張をすることです。世間はなかなか新しい知見を認めようとはしません。しかし、それを support する証拠が出て来たりすると、認めてくれるようになります。

ります。いい続けることです。

米中のモンスーンの会議の帰途に、東京に立ち寄ってくれた K.M. Lau は、“Aqua-planet では、30日の周期しか出ないのに、現実では40日の周期が出るのは、やはり、air-sea interaction が重要だ”と話して帰ってゆきました。半年も経つと、それなりに仕事をしてきます。頑張らねば、と、気分も新たにした次第です。

(住 明正)

気象集誌編集委員会からのお知らせ

ページ・チャージの改訂について

気象集誌のページ・チャージは、現在印刷ページで12ページ以内の部分については1ページ当たり5,000円、それを超える部分については刊行実費を負担することとなっています。気象集誌編集委員会では現在の物価状況に対応し、かつ英文校正を含む気象集誌のレベル向上を推進するため、理事会の承認を得て以下の様にページ・

チャージを訂正することとしました。

印刷ページで12ページ以内 6,000円/ページ

印刷ページで13ページ以上の部分 12,000円/ページ

(刊行実費)

上記の改訂は1988年2月号(第66巻, 第1号)掲載分の論文・要報から実施されます。

4年毎のオゾン・シンポジウム開催のお知らせ(2)

IAMAPの国際オゾン委員会(IOC)主催による上記シンポジウムについて、本誌1987年1月号でお知らせしましたが、第2報が来たので要点をお知らせします。

1. 1988年8月8-13日, 西独, Göttingen 大学でシンポジウム(題目は前回のお知らせにほぼ同じ)。
2. 上記シンポジウムに先立ち, 1988年8月4-6日, Göttingen 大学及び近くの Max-Planck Institut für Aeronomie で、「対流圏オゾンに関する workshop」。
3. アブストラクト提出期限 1988年1月10日
完全な原稿の提出期限 1988年6月20日
写真撮影用の原稿をシンポジウム期間中に提出

参加者へのプロシーディングの配布 1988年10月

4. Preregistration, アブストラクト等の連絡・提出先
Dr. Peter Fabian
Chairman Local Organizing Committee
Max-Planck Institut für Aeronomie
Postfach 20
D-3411 Katlenburg-Lindau,
Fed. Rep. of Germany
5. その他詳細は、東京管区気象台 清水正義(IOC委員)まで。

(文責 清水正義)